



新連携・地域資源活用・農商工連携

現代に蘇る「あおり藍」

独立行政法人 中小企業基盤整備機構

新事業支援部 連携事業支援課 課長代理 二宮 健晴

紹介事例の概要

団体名 あおり藍産業協同組合
認定事業区分 地域資源活用

認定事業名 青森独自の染料化技術を核とする「あおり藍」ブランド商品の開発、製造、販売

認定日 平成24年6月20日

■藍染めの歴史

藍染めは、紀元前の古代エジプトやインドで行われ、日本でも奈良時代に藍が栽培されていたことが文献等で確認されるなど、人類最古の染料と言われている。日本ではその後、鎌倉時代以降に武士のよろい下に藍染めが用いられることによって藍の需要が高まり、江戸時代に木綿の着物が庶民に普及し、木綿に美しく染まる藍染めが好まれたことから、阿波(徳島)をはじめとした各地で藍染めが行われるようになった。

明治以降も盛んに行われたが、明治30年代にヨーロッパでコールドールを原料とする化学染料が開発されると、日本の藍染めは衰退の一途をたどることになる。現在では徳島を中心とした一部のみで、主に伝統工芸品用として藍染めが行われるに留まっているが、一方で天然藍の持つ美しさや風合いが見直され、深く鮮やかな「JAPAN BLUE」が再評価

されているところである。

■組合の設立

本事例の事業主体となる「あおり藍産業協同組合」(以下、組合という)は、縫製業や特殊印刷業をはじめとする青森市内の異業種4社(株アプティマルワ、株青森豊成、近江刺繍、(有)マルミ電設)で組織されている技術集団である。組合が設立され本事例に取り組むことになったのは、組合の代表理事であり、その組合員企業(株アプティマルワ)の社長でもある吉田久幸氏が、平成13年に弘前大学の北原晴男教授による藍染めの講演を聞いたことが契機であった。

江戸時代に各地で藍染めが行われたように、津軽地方でも藍が栽培され、地元では貴重な資源として取り扱われていた。



吉田代表理事と藍染め商品

明治維新後は落剥した士族階級の救済と地場産業育成のために、藍染めの更なる産業化が推し進められたが成功を収めることができず、日本全国的に見ても明治30年以降は国内の藍染めが一気に衰退したため、津軽地方ではリンゴの栽培に切り替えられた。津軽地方で藍染めが行われていたことは忘れられつつあるが、化学染料では出せない天然藍の深い色合いや薬品としての効能などについて研究が進んでいる、というものであった。

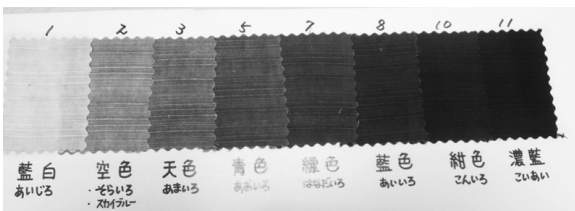
この話を聞いた吉田氏は、藍染めの工程に興味を持ち、一般人で集まるサークルを結成して、自ら藍染めを実践していった。実際の作業を重ねるにつれて染料化技術の奥深さを認識していった吉田氏は、この藍を地元で栽培して、藍染めを青森独自の産業にすることによって、地域経済の活性化につながれないものかと考えるようになっていった。そこで平成15年から青森市の「産業ネットワーク推進事業」の支援を受けながら、異業種を巻き込んだ研究会を立ち上げ、あおり藍の産業化への研究を進めていった。

研究の結果、これまでの藍染め工程とは異なる染液の調整に成功し、工程を大幅に短縮できる目途がついたことから、青森県中小企業団体中央会に相談し、そのサポートを受けて平成18年に、異業種4社によって製品化工程を一括して行う組合が設立された。

青森市及び中央会は、その後も組合の事業に密接に関与して事業をサポートしており、吉田氏は「公的機関にここまでサポートしてもらえることは大変ありがたい」と、長年の協力に感謝している。

■藍染めポロシャツ 宇宙へ飛び立つ

ここで伝統的な藍染めと、組合が確立していった染料化技術について簡単に触れたい。従来の藍染めでは、藍の乾燥葉を発酵させて得られる「すくも」と呼ばれる染料によって染液を調整してきたが、職人による長年の経験と勘を頼りに製造するものであり、かつ発酵に100日という長期間を要するものであった。



染料化技術による色のバリエーション

これに対して組合で研究を重ねていった結果、藍の乾燥葉をミクロン単位でパウダー化することにより、従来の20分の1以下の短期間で染色し、染色堅牢度を高くする（色落ちしづらい）ことに成功した。また調合割合を数値化することによって、色の濃淡を適正に製品化

することも可能になった。これにより、化学染料の出現で細々と伝統技法の地位に甘んじざるを得なかった天然藍による藍染めが、100年の時を経て現在の工業化手法として蘇ったのである。

また弘前大学の北原教授と共同研究を行った結果、従来の藍染液よりも「トリプタンズリン」と呼ばれる抗菌活性物質が約5倍も含まれるという試験結果を得た。民間伝承で古くから伝えられてきた天然藍の抗菌作用が実証され、かつ組合独自の染料化技術によってさらに高まることが確認されたのである。

これらの研究を重ねていくうちに、青森市や中央会、弘前大学のみならず、青森市内で藍を栽培する農事組合法人羽白開発や地元金融機関、公設試験場、デザイナー等との多様な連携が生まれ、独自染料化技術を活用した商品化の機運が高まっていった。

中でも㈱アプティマルワの親会社（丸和繊維工業㈱）からの紹介でコラボレーションすることになった裁断技術が本事業を大きく推進させることになった。機能系被服デザイナーの中澤愈氏が考案した「動体裁断」という衣服設計であり、通常の衣服と異なり、身体の動きにフィットしながら運動を妨げずに、着用時には引き吊れを感じさせないというものである。

この組合技術による抗菌性、防臭性の



山崎宇宙飛行士着用
藍染めポロシャツ

確保と、新たに動体裁断技術を取り入れて作られた藍染めのポロシャツは、スペースシャトル・デイスカバリー号に乗り込む山崎直子宇宙飛行士が着用する船内被服に選定され、平成22年4月に宇宙へ飛び立ち、一躍脚光を浴びた。原料生産から染色加工までの全工程を青森市内で行った純粋な「Made in AOMORI」の藍染めが、大きく一歩を踏み出すことになったのである。

■あおもりの未来にむかって

あおもりの藍を原料とした製品の産業化・特産品化を図ることにより、休耕田等に藍を植えて農業者の所得向上につなげ、ひいては地域経済活性化や地域雇用そして視覚的にも美しい藍畑を創出したいという吉田氏及び組合の想いは、デイスカバリー号船内被服への採用や、その後の大手百貨店企画による限定販売品発売によって、その一端を実現したが、一方で今後の中長期的なプランを組合として明確には描き切れていなかった。

そのような中で、平成23年11月に「一日中小企業庁inあもり」が青森市内で開催され、組合も参加したところ、中小機構東北本部の鎌田謙一プロジェクトマネージャーに事業相談する機会を得た。相談していく中で、同事業のポテンシャルの高さと地域活性化の意向の高さがかがえたことから、地域産業資源活用事業計画の認定を目指し、今後5年間の事業計画を策定していくことになる。

認定を受けるにあたってはさまざまな根拠や連携体との関係の再確認、そして何よりはっきりとした事業の計画とその実現性が問われることになったが、「認定を目指すことによって、計画の内容が具体的に整理され、スピード感が出て来た」と吉田氏が語るとおり、短期間で事業計画をまとめあげ、平成24年6月に計画の認定を受けるに至ったのである。

組合の事業は緒に就いたばかりであり、今後は予期せぬ困難も起こり得るが、高い理念に賛同した関係者と一体となって、着実に前進していくものと思われる。「青森」という地名は、江戸時代初期に現在の青森市本町付近に青い森があり、港に入る船の目印になって、「あもり」と呼ばれたことに由来すると言われている。誠に美しい地名の由来であるが、遠くない将来に「あもり藍による青」という新たな意味も加わることを期待させる本事例の内容である。